

9月13日 年間第24主日 マタイ18章21～35節 先に愛し、ゆるしを与えてくださる神

マタイの18章は教会共同体のあり方についての教えが述べられているということですが、今日の箇所はその結びです。先週に続く箇所であり、内容も先週に続いて「ゆるし」がテーマとなっています。「仲間をゆるさない家来のたとえ」を通して、神とわたしたちの関係が示されます。

今日の箇所もペトロがイエスに尋ねるところから始まります。なんだかマタイの福音所ではペトロは狂言回しの役割を与えられているようにも感じられますね。先々週の福音と同様、ペトロの質問をイエスは否定されているようにも思えますが、ここでもイエスの教えを引き出す役割をしているようです。

「七回まで」だったら数えることができます。「あなたはこれまで七回もわたしに対して罪を犯したのだから、今度はゆるしません」ということができますね。でも、七の七十倍、490回だったら数えてられませんね。数えたとしても、491回目からはゆるさなくてもいいということではなく、限りなくゆるしなさいということです。

その根拠とされるのがそのあとのたとえ話です。一万タラントンの借金を主君にゆるしてもらった家来が百デナリオンの借金をゆるさなかった話です。一万タラントンは百デナリオンの一万倍だそうですから、百デナリオンは数か月分の給料だそうですので、仮に百万円だとすると、一万タラントンは百億円ということになります。最近では詐欺事件などでたまに聞きますが、わたしにとっては縁のない金額です。それだけの借金をゆるしてもらった家来はその一万分の一の借金を免除するべきなのは当然ですね。そして、それを知った王から牢に入れられるのも仕方ないことです。牢に入れられると働けないので余計に借金が返せないようにも思いますが。それはともかく、主君が神、家来が人間を表しているのは明らかでしょう。

七の七十倍にしてもそうですが、イエスのたとえ話はちょっとどこかえらく極端なように思います。このような極端な、また非現実的なたとえ話を通してイエスは神のゆるしの大きさを教えられます。そしてたとえ話の順番から考えると、先にゆるしているのは神のほうです。つまり、わたしたちはすでに神からゆるされているから人をゆるすことができるということです。他の箇所から「ゆるし」を「愛」に置き換えてもいいでしょう。

神からのゆるしの最高のしるしは何でしょうか。それはイエスの十字架です。父なる神はわたしたちのために最も大切な御子を与えてくださり、御子イエスはご自分の命をわたしたちの罪のあがないとしてさげてくださいました。つまり、わたしたちの罪の代価、すなわち神に対する借金を立て替え払いしてくださったということです。わたしたちは、互いに愛し合い、ゆるし合うことによって、イエスが立て替えてくださった借金を少しずつ返していくことができるのです。

(柳本神父)